



夫の留守中

浴室にこぼれる
人妻るり子の喘ぎ声

ルンルン

夫の留守中
浴室にこぼれる
人妻るり子の喘ぎ声

著者：ルンルン

夕暮れの光が窓の外で揺れ、街の喧騒は徐々に遠ざかる。

たくみとり子は仕事帰りの疲れを少し引きずりながら、るり子のマンションの玄関をくぐった。

この夜は、るり子が「手料理を振る舞うね」と誘ってくれた日だった。

「ただいま……」

と小さく声を漏らするり子。

いつもと変わらない家の空気に、しかしどこか普段より張り詰めた緊張感が漂う。

「今週は旦那さん、出張だよね」

たくみは軽く口を添えた。

るり子は少し頬を赤らめ、買い物袋を持ちながら答える。

「うん……だから、今夜はちょっとだけ……ゆっくりしていって」

その言葉に、たくみの胸は小さく跳ねた。

二人は玄関を入ると、どちらからとも無く抱き合い、熱いキスを交わした。

それはこれから何かが始まる予感だった。

この一週間だけの“密かな時間”が、二人に与えられている。

るり子はリビングの椅子に腰掛け、買い物袋から食材を出しながらも、どこか緊張したように足を組み替える。

薄く汗ばんだ肌が、電灯の光に柔らかく反射している。

「先にお風呂に入っていいよ」

その言葉を口にしたとき、るり子の頬は熱を帯び、ほんのわずかに声が震えた。

心の奥では、夫の留守という背徳感と、たくみとの密かな時間に対する昂ぶりが交錯する。

(今夜は……たくみくんと二人きりか……)

頭の中で繰り返すたびに、下腹部に微かな疼きが走る。

食材を確認しながらも、手が自然と内ももに触れるのを抑えきれない。

彼女の声は少し上ずっていた。

たくみもそれだけで理性を押し流されそうになる。

「ありがとう……」

自然な声の中に、心臓の高鳴りが混ざる。

たくみは軽く息を整え、廊下を進む。

脱衣所で素っ裸になると、バスルームに入ってしまった。

「今日は……ゆっくり、二人の時間だな……」

湯船につかりながら思わず心の中でつぶやく。

「変じゃない……？ わたし、こんなにドキドキして」

羞恥心と期待が入り混じる。

平静を装おうとするたび、心拍は速まり、太ももの奥が熱くなる。